

倉橋賞を受けて

—— 研究論文の序文にかえて ——

平岡節

受賞に際して何か書くようにと編集部から依頼をうけた。しかし、研究内容については、私自身スッキリしないものを残したまま、学会に持ち出してしまったので、こんなことになって恐縮している。したがって、その後かなり修正したところもあり、今なお疑問を残している。幸い研究についても寄稿する機会を与えられたので、修正後のものについて、改めて先生方から御批判・御指導をいただきたいと思っている。

私として何よりも先きにいたいことは、この研究のために大切な育児日記を提供して下さった六名の若いお母さん方（北陸学院卒業生）と「赤ちゃんの日課」その他の記事を通じて知ったある幼児研究グループ（婦人之友）のお母さん方にお礼を申したいことである。

つぎに、別稿の研究論文の序文のようなつもりで、研究動機というか意図といった

ものを少しばかり書くことをお許しいただきたい。

それを簡単にいってみると、以前からもっていた保育内容の絵画製作の研究課題と、教育の一側面を「発展的人間」にする働きかけとしてとらえた時の課題が結びついたものである。

話の順序として私の絵画製作の研究動機とその課題にふれてみよう。少々昔ばなしになるが、「絵画製作」を「手技」と呼んでいた頃のことである。その頃私共少数のものは、子どもたちとともに、これを「お仕事」と呼んで、毎日個人を中心にした問題解決学習による自由作業の形態をとっていた。私はそこに子どもの目的達成への努力のなかにすばらしい創造性が育つのを見た。ここで私は問題解決を集団思考とその実践へと発展させる方法をとってみた。そこでは、子どもたちが「考えと力」を出し合ううろわしい姿をみて感激し

た。このお仕事の時間こそ子どもたちが「みんなでかしくなる時だ」と気がつき、指導者として、その見通しをたてる必要にせまられた。それから、一人ひとりの材料に対する態度と作品、クラス討論の内容と子どもの変化の記録をとり続けた。それを整理し、幼児の造形活動（描画・積木などを含む）の発達段階——今思えばまずい題であるが——としてまとめた。以来、それに関連した課題をもち続けている。

もう一つの課題。それは入園当初の子どもに能力に、すでに相当の開きがある。これと関連して、幼児から医学・心理学以外に積極的に教育学の立場が入りこむ余地はないものだろうかと考えていた。

子どもたちをみつめ、そこにある事実とそれに関係する諸条件を調べ、それと前記の教育の目標を結びつけていく試みのなかで、教育方法をみつめていきたいと思つて、この研究をはじめた。だから、やっと糸口をみつけたところである。

あの小さな子どもたちの「いたずら」のすばらしさ、これを大切に育てることこそ、「おとなの責任だ」ときげびたい衝動にかられている。

（愛知県立女子短期大学）